

特別展「美術の国徳島1 昭和の文展、帝展作家」

県立近代美術館では、開館以来、徳島の美術に関する調査研究を続け、作品の収集にも努めてきました。現在ではコレクションの約半数を、徳島ゆかりの美術品が占めるにいたっています。

特別展「美術の国徳島」のシリーズでは、さまざまな切り口で、個々の作家の活動をご紹介します。第1回で取り上げるのは、昭和戦前期の官設展、帝国美術院展覧会(帝展)と文部省美術展覧会(文展)で活躍した6人の作家たちです。

コレクションを通じて、徳島の美術風土について考えていただければと思います。



旅の画家 三宅克己(1874-1954)

三宅は優れた風景画家であり、水彩画家でした。明治の中期から後期にかけて水彩画が大流行し、社会的な現象となったことがあります。その立役者のひとりが三宅でした。

同時に三宅は、旅の画家でした。国内津々浦々を旅しただけでなく、海外旅行が一般的でなかった戦前に、6回ヨーロッパに渡り、世界各地の風景を見つめました。

<溪流(箱根底倉)>1941年



静かな人 清原重以知(1888-1971)

清原の生涯を振り返ると、華々しいエピソードや、奇抜なエピソードがほとんど見あらず、逆に旧制富岡中学校(現県立富岡高校)時代は、帰りが遅くなった清原を心配して家族が探しに行くと、清原は橋の上から何時間も水の流れを見つめていたとか、草花を育てることが上手で、晩年は庭に見事な菖蒲の花を咲かせたなど、物静かな人柄を感じさせるエピソードばかりが語り継がれています。古い中国の知識人のように、清原の理想は世俗を離れて静かに暮らすことにあったのかもしれない。

<雪暮れ>1937年



日本画家らしからぬ日本画家 広島晃甫(1889-1951)

広島は1919(大正7)年の第1回帝国美術院展に初出品し、いきなり特選を、翌年の第2回展でも特選を受賞しました。帝展が絶対的な権威を持っていた時代の鮮烈な画壇デビューでした。それまでの日本画の世界では技巧優先の風潮が幅をきかせ、広島の描いた情感豊かな表現はほとんど見かけないものでした。また技巧という点でも、簡素で、当時の人たちの目には、ずいぶんと斬新な日本画に見えたはずです。

<夕暮れの春>1920年



徳島のモダン・ボーイ 河井清一(1891-1979)

旧制徳島中学（現県立城南高校）に通った時代に、河井は、その後の人生を決定付けた2つのことと出会いました。ひとつは洋画で、美術教師の感化を受け、油絵を描くようになりました。もうひとつはキリスト教です。河井は、日本基督教団徳島教会で洗礼を受けており、中学時代は、上級生だった賀川豊彦と教会活動に従事していたといわれます。また、その頃は徳島における中学野球の草創期で、河井も野球部に所属していました。洋画、キリスト教、そして野球、いずれも当時は新しい時代を象徴する西洋文化でした。

<こかげ>1922年



美術とは学習するもの 伊原宇三郎(1894-1976)

伊原ほど綿密に計画を立て、下図を作る画家はあまりいません。伊原にとって絵を描くということは、まるで数式を解くように、秩序立てて考える作業だったと思われれます。画面からは即興の面白さや味わいといったものが慎重にぬぐい去られ、でき上がった絵は生真面目です。パリ留学時代にも、伝統的な西洋絵画の理論体系を身につけたいと心に決め、勤勉な生活を続け、留学生たちの手本とされました。そして、それまでの日本洋画に欠けていた量感表現を確立したのです。

<榻上二裸婦>1932年



宗教者 服部仁郎(1895-1966)

服部が彫刻家であったことは、まぎれもない事実ですが、服部は彫刻家であると同時に、もうひとつの顔を持っていました。宗教者としての顔です。生長の家を立教した谷口雅春第一の弟子として、生活の多くを宗教活動に捧げていたのです。今でも生長の家では、「生長の家の薬師如来」として尊敬を集めています。帝展、文展、戦後は日展への出品こそ欠かしませんでした。美術界での活動はこれがほぼ全てです。晩年まで彫刻を作り続けたものの、美術の世界で存在感が希薄だったのは仕方がないことでした。

<使命>1924年